武蔵野日曜集会 聖霊降臨節

霊身一如

――レビ、列王紀略下、ヨブ、詩篇、箴言、イザヤ、ほか――

１９７２年5月21日
小池辰雄

【レビ19】

1 エホバ、モーセに告げて言いたまわく。2 汝イスラエルの子孫の全会衆に告げてこれに言え、汝等宜しく聖あるべし、そは我エホバ汝らの神聖あればなり。……

17 汝心に汝の兄弟を憎むべからず、必ず汝の隣人を勧戒むべし。彼の故によりて罪を身に受くる勿れ。18 汝仇をかえすべからず。汝の民の子孫に対いて怨みを懐くべからず。己のごとく汝の隣を愛すべし。我はエホバなり。

【列王紀略下2】

8 エリヤその外套をとりて之を巻き水をうちけるにこなたとかなたにわかれたれば、二人は乾ける土の上をわたれり。9 渉りける時エリヤ、エリシヤにいいけるは、我が取られてなんじを離るる前に汝わが汝になすべきことを求めよ。エリシヤいいけるは、なんじの霊の二つの分の我におらんことを願う。10 エリヤいいけるは、汝難き事を求む汝もしわが取られてなんじを離るるを見ばこの事なんじにならん。しからずば此事なんじにならじ。11 彼ら進みながら語れる時、火の車と火の馬あらわれて二人を隔てたり。エリヤは大風にのりて天に昇れり。12 エリシヤ見て、わが父わが父イスラエルの兵卒よその騎車よと叫びしが、再びかれを見ざりき。ここにおいてエリシヤその衣を二片に裂き、13 エリヤの身よりおちたるその外套をとりあげ返りてヨルダンの岸に立ち、14 エリヤの身よりおちたる外套をとりて水をうち、エリヤの神エホバはいずくにいますやと言い、而して己も水をうちけるに水こなたとかなたに分れたればエリシヤすなわち渡れり。15 エリコにある預言者の徒対岸にありて彼を見て言いけるは、エリヤの霊エリシヤの上にとどまると。かれら来たりてかれを迎えその前にて地に伏して、云々

【ヨブ32】

8 但し人の衷には霊あり、全能者の気息人に聡明を与う。

【ヨブ33】
4神の霊われを造り、全能者の気息われを活かしむ。

【詩篇33】
6もろもろの天はエホバのみことばによりて成り、天の万軍はエホバの口の気によりてつくられたり。

【箴言10】
12怨恨は争端をおこし、愛はすべての愆を掩う。

【箴言17】
9愛を追求むる者は人の過失をおおう。人の事を言いふるる者は朋友をあい離れしむ。

【イザヤ6】
1ウジヤ王の死にたる年われ高くあがれる御座にエホバの坐し給うを見しに、その衣裾は殿にみちたり。2セラピムその上にたつ、おのおの六つの翼あり、その二つをもて面をおおい、その二つをもて足をおおい、その二つをもて飛翔り。3たがいに呼びいいけるは、聖なるかな聖なるかな聖なるかな、万軍のエホバその栄光は全地にみつ。4かくよばわる者の声によりて閾のもとい揺りうごき家のうちに煙みちたり。5このとき我いえり、禍いなるかな我ほろびなん、我はけがれたる唇の民のなかにすみて穢れたるくちびるの者なるに、わが眼は万軍のエホバにまします王を見まつればなりと。
6ここにかのセラピムのひとり鉗をもて壇の上よりとりたる熱炭を手にたずさえて我にとびきたり。7わが口に触れていいけるは、視よこの火なんじの唇にふれたれば既になんじの悪はのぞかれ、なんじの罪はきよめられたりと。8我またエホバの声をきく。曰く、われ誰をつかわさん、誰かわれらのために往くべきかと。そのとき我いいけるは、われ此にあり我をつかわしたまえ。

【イザヤ11】
1エッサイの株より一つの芽いでその根より一つの枝はえて実をむすばん。2その上にエホバの霊とどまらん。これ智慧聡明の霊、謀略才能の霊、知識の霊、エホバをおそるるの霊なり。

【イザヤ42】
1わが扶くるわが僕わが心よろこぶわが撰人を見よ。我わが霊をかれにあ

たえたり。かれ異邦人に道をしめすべし。

【イザヤ59】

21 エホバいい給わく、なんじの上にあるわが霊、なんじの口におきたるわがことばは、今よりのち永遠になんじの口よりなんじの裔の口より汝のすえの裔の口よりはなれざるべし。わがかれらにたつる契約はこれなりと。此はエホバのみことばなり。

【ヨエル2】

12 然れどエホバ言いたもう。今にても汝ら断食と哭泣と悲哀とをなし心をつくして我に帰れ。13 汝ら衣を裂かずして心を裂き汝等の神エホバに帰るべし。

【ゼカリヤ12】

10 我ダビデの家およびエルサレムの居民に恩恵と祈祷の霊をそそがん。彼等はその刺したりし我を仰ぎ観、独子のために哭くがごとく之がために哭き、長子のために悲しむがごとく之がために痛く悲しまん。

【マタイ3】

15 イエス答えて言いたもう『今は許せ、われら斯く正しき事をことごとく為遂ぐるは、当然なり』16 イエス、バプテスマを受けて直ちに水より上り給いしとき、視よ、天ひらけ、神の御霊の、鴿のごとく降りて己が上にきたるを見給う。17 また天より声あり、曰く『これは我が愛しむ子、わが悦ぶ者なり』

【使徒1】

8 然れど聖霊なんじらの上に臨むとき、汝ら能力をうけん、而してエルサレム、ユダヤ全国、サマリヤ、及び地の極にまで我が証人とならん』

【エペソ1】

13 汝等もキリストに在りて真の言、すなわち汝らの救の福音をきき、彼を信じて約束の聖霊にて印せられたり。14 これは我らが受くべき嗣業の保証にして、神に属けるものの贖われ、かつ神の栄光に誉あらん為なり。

【エペソ2】

22 汝等もキリストに在りて共に建てられ、御霊によりて神の御住となるなり。

【エペソ3】

16 父その栄光の富にしたがいて、御霊により力をもて汝らの内なる人を強く

し、17信仰によりてキリストを汝らの心に住まわせ、汝らをして愛に根ざし、愛を基とし、18凡ての聖徒とともにキリストの愛の広さ・長さ・高さ・深さの如何許なるかを悟り、19その測り知る可からざる愛を知ることを得しめ、凡て神に満てる者を汝らに満たしめ給わん事を。

【エペソ6】

17また救の冑および御霊の剣、すなわち神の言を執れ。

【ヘブル9】

11然れどキリストは来らんとする善き事の大祭司として来り、手にて造らぬ此の世に属せぬ更に大なる全き幕屋を経て、12山羊と犢との血を用いず、己が血をもて只一たび至聖所に入りて、永遠の贖罪を終えたまえり。13もし山羊および牡牛の血、牝牛の灰などを穢れし者にそそぎて其の肉体を潔むることを得ば、14まして永遠の御霊により瑕なくして己を神に献げ給いしキリストの血は、我らの良心を死にたる行為より潔めて活ける神に事えしめざらんや。

【ペテロ前4】

12愛する者よ、汝らを試みんとて来れる火のごとき試練を異なる事として怪しまず、13反ってキリストの苦難に与れば、与るほど喜べ、なんじら彼の栄光の顕れん時にも喜び楽しまん為なり。14もし汝等キリストの名のために謗られなば幸福なり。栄光の御霊、すなわち神の御霊なんじらの上に留まり給えばなり。

●霊が止まる霊止

キリスト教の三大節は、ユダヤ教にも三大節がありますが、クリスマスと復活節とペンテコステです。この中で我々自身にとって一番大事なのは、この今日のペンテコステの日であります。もちろん、キリストの降臨また十字架、復活はその土台ではありますけれども、我々自身のことに一番密着して大事なのは何といってもペンテコステです。ところが、私が育ってきた無教会においても、特にペンテコステといって憶えたことはおそらくなかった。それくらいに、このキリスト教の歴史の始まりがペンテコステに始まっているのに、これをいい加減にしている。これは非常な欠陥であると思う。……

御霊のことは、聖書は創世記から黙示録まで神の霊が一貫して貫いている書です。少しく旧約から学んでいきたいと思います。

ご承知のとおり、この

「霊」
という字は
「ルーアッハ」
といって、ギリシア語では
「プニューマ」
ですが、旧約に約三百回くらい重要な箇所があるわけです。自然界においては
「風」
です。霊界においては
「神の息」
また人間の息。要するに、「風」、「気」、これはみな「霊」という。アラビヤ語では、風と霊とはちょっと母音が違うんですけれども、とにかくしかし、語幹は同じです。

創世記2章の、

「神が人の中に息を吹き入れたらば、生けるものとなった」

という、この字は「ルーアッハ」という字は使ってなく、
「ネフェシュ」
という字です。「ネシャマー」とか「ネフェシュ」とかいう言葉が別にありますけれども、一番高次な意味における「霊」という字は「ルーアッハ」という字です。この神話にあるように、地的な素材に神の息――それを「ネフェシュ」と言おうが――神の息がここに吹き入れられた。そういう意味において中心は、

「神の息が吹き入れられて、この生けるものとなった」

という。人間の生命（いのち）は神の息によっている。「霊が止（とど）まる」と書いて、
「霊止（ひとど）」
と読みます。即ち、霊止は受け霊（ひ）したもの、霊を受けたもの。即ち、一番本質的な意味においては、霊止（ひとど）ということです。私たちは、霊が止（とど）められた、霊が宿されたものなんです。

「神その形の如くに人を造り給えり」

とあるけれども、「形」は実は外側の姿ではなくして、この霊質が神的に造られているのが、
「その形の如く」
ということです。もちろん、この旧約の創世記1章のこの記事は、非常に素朴な言い方であるけれども、その形ならざる形が――形がなくして具体的なもの――これが霊であります。観念でもなければ形でもない。形でもなく観念でもない。しかし、もっとも具体的な存在です。具体的に在るもの、これが神の霊です。私たちが、
「人間は万物の霊長である」
と言うが、そういった意味において、
「本来、神の霊の止められたもの」

ということ。そこに立ち返りながら、限りなく立ち返りながら進んでいくというようなわけであります。

●魂は神の霊を呼吸する

ヨブ記32章から33章にかけて、エリフというヨブの友人がでてくる。32章8節に、

「8**但し人の衷（うち）には霊あり、全能者の気息（いき）人に聡明（さとり）を与う。**」（ヨブ32・8）

とある。霊の働きというものは、それはあるときは愛の力であり、あるときは本当にカリスマ的な霊的な能力であり、また、ここにあるように「聡明」であり、智恵であります。霊の持っている素子というものは、とても数えることのできない、旧約聖書から分析しても非常にいろんな多種多様なんです。霊といえば、何かただボヤッとした内容かと思うと、そうではない。非常に多種な内容を持っていますから、その点は間違わないようにしてください。

33章4節のところに、

「4**神の霊われを造り、全能者の気息（いき）われを活かしむ。**」（ヨブ33・4）

とある。これは非常に大事な言葉ですから、忘れないように。この場合の

「神の霊」

はただ

「ルーアッハ エール」

という非常に簡単な字が使ってある。「全能者の気息」の「気息」は

「ネシャマー」

という字が使ってある。この場合に、「霊」と「気息」がもちろん同義語的に、両方含んだような意味で使われているわけです。

神の霊が私を造った。自分の創造はこの神の霊により、全能者の気息によって自分は生きているという。ですから、我々が呼吸するこの呼吸というものも、肉体的な呼吸はなるほど空気を吸っているけれども、魂の呼吸は神の霊を受けとること。まさに

「受霊（うけひ）」

する。魂が神の霊を呼吸するのは即ち、祈り心です。祈りの心です。そういう意味において、このヨブ記33章4節は非常に注目すべき句です。

今、いろいろな種類と言いましたのは、イザヤ書11章です。ここに畳みかけて書いてある。

「1**エッサイの株より一つの芽いでその根より一つの枝はえて実をむすばん。**
2**その上にエホバの霊とどまらん。これ智慧聡明の霊、謀略才能の霊、知識の霊、エホバをおそるるの霊なり。**」（イザヤ11・1～2）

霊はいろいろな性質を持っている。これは別々の霊ということではないですよ。霊はこれこれの面を持っている。御霊というのは、

「自分は知識の霊だけだ」

とか、そんなようなことではないので、御霊を受ければ、ここにあげられているいろんな面がその時に応じて自在に働いてくださる。

●エホバは聖なるもの

旧約からいろいろ探り出したら、あなた方は充分、旧約聖書における

「霊」「ルーアッハ」

の研究ができるわけです。どうぞ、そんなことも聖書を読みながらやってみてください。旧約で一番霊的な次元の高いところは何といってもイザヤ書です。イザヤ書はこの全66章、まさに霊の預言書です。旧約聖書から、もし一つを取り出せと言われたら、文句無しにこのイザヤ書を取り出したくなる。イザヤ書だけを、あなた方はポケットに入れてしょっちゅう読んでいてもいいくらいなものだ。それくらいイザヤ書は非常に大事なところです。特に6章のイザヤが召命にあずかったところ。イザヤは特に深く祈っていたときに、こういう霊的な幻にでっわしたわけです。

「1ウジヤ王の死にたる年われ高くあがれる御座にエホバの坐し給うを見しに、その衣裾（もすそ）は殿にみちたり。

というような言い方をしている。そして、六翼の火炎天使が天翔けっている。

2セラピムその上にたつ、おのおの六つの翼あり、その二つをもて面（おも）をおおい、その二つをもて足をおおい、その二つをもて飛翔（とびかけ）り。3たがいに呼びいいけるは、聖なるかな聖なるかな聖なるかな、万軍のエホバその栄光は全地にみつ。」（イザヤ6・1～3）

「聖霊」と言いますが、イザヤは特に神のことを

「聖者（しょうじゃ）」

と言った。

「イスラエルの聖者かく言いたもう」

という。

「カードーシュ」（聖）

という字です。何といっても、「聖書」というので、神は聖なる神で、レビ記の19章にもあるとおりに、

「エホバは聖なるものだから、汝らもまた聖（きよ）くあるべし」

という。これは祭司典の、祭司宗教の土台になる言葉です。レビ記19章の、

「エホバ、モーセに告げて言いたまわく。2汝イスラエルの子孫（ひとびと）の全会衆に告げてこれに言え、汝等宜（よろ）しく聖（きよく）あるべし、そは我エホバ汝らの神聖（きよく）あればなり。」（レビ19・1～2）

これがやはり「カードーシュ」という字です。特に祭司典、祭儀的な宗教の根本観念であります。

●聖なる神の霊は愛を持っている

しかし、その聖き神が、同じ19章の17節にいきますと、

「17**汝心に汝の兄弟を憎むべからず、必ず汝の隣人(となりびと)を勧戒(いまし)むべし。彼の故によりて罪を身に受くる勿(なか)れ。**18**汝仇(あだ)をかえすべからず。汝の民の子孫に対(むか)いて怨みを懐くべからず。己のごとく汝の隣を愛すべし。我はエホバなり。**」（レビ19・17～18）

旧約の言い方に後の方に、

「我はエホバなり」

とよく書いてある。非常に多いんです。このレビ記を読んでごらんなさい。何かを言っては、「我はエホバなり」と書いてある。25節にも、28節にも、30節にも書いてあるし、全部、下の方に「我はエホバなり」と書いてある。この「我はエホバなり」ということが決してつけたりに書いているのでなくて、これが土台なんです。

「自分がヤーヴェーの神であるから、お前たちはこうあれよ」

と。「必ずそうさせてやるよ」と。むしろ福音的に、

「必ずそうさせてやるよ」

ということです。「こうあれ」ということはほったらかしの命令ではなくして、

「我はエホバであるから、私により頼むならば、自然にそうなっていく」

というように、福音的に読まなくてはいかん。もちろん、イスラエル人はそういった福音的な角度には読みそこなってしまったけれども。

しかし、聖なる神の心は何かというと、愛であるんです。愛であり、また

「聖とする」

ということは

「救う」

ということです。神聖ということは、聖なるものに対しては畏れかしこむ。「畏神」という「畏」の字が出てくるわけです。畏れかしこみてひれ伏すところに、今度は「畏親」、畏れ親しむという。聖なる神の霊は愛を持っているから、そこに本当により頼むときに無条件に親しむということがゆるされてくるわけです。しかし、そのイザヤ書6章にありますように、この聖なる神の前にまず畏れまして、

「4**かくよばわる者の声によりて閾(しきみ)のもとい揺りうごき家のうちに煙みちたり。このとき我いえり、禍いなるかな我ほろびなん、**

と。自分は罪びとだから、この聖なる神の前に自分はとても立てないから亡びるという自覚、

ひれ伏しの自覚です。

5我はけがれたる唇の民のなかにすみて穢れたるくちびるの者なるに、わが眼は万軍のエホバにまします王を見まつればなりと。

●聖霊と火でバプテスマ

ところが、そのようなひれ伏しの魂に対しては、神さまの方では、

6ここにかのセラピムのひとり鉗(ひばし)をもて壇の上よりとりたる熱炭(あかきひ)を手にたずさえて我にとびきたり。7わが口に触れていいけるは、視よこの火なんじの唇にふれたれば既になんじの悪はのぞかれ、なんじの罪はきよめられたりと。

旧約ですから、こういった霊的な浄化のひとつの示しがきたわけです。要するに、神の火に自分が焼かれる。焼かれたのは本当に神の火のごとく今度は、火で焼かれて火のごとくこちらが成っていくわけだな。

8我またエホバの声をきく。曰く、われ誰をつかわさん、誰かわれらのために往くべきかと。そのとき我いいけるは、われ此(ここ)にあり我をつかわしたまえ。」（イザヤ6・4～8）

そして、本当に神の霊が彼に臨んできたから、そこで、

「われここにあり、我をつかわしたまえ」

と言って進んでいく。もちろん、焼かれたところで、これは霊的なひとつの現象であって、預言者イザヤがそれから全く神の如く聖になったというのではない。これは神の恩寵の「罪の滅ぼし」ですから。根底的にやはりこれは罪を消してくださった。

「もはや、汝の罪を思わない」

とエレミヤ記にもあるように、神さまの側からいつも私たちを変質変貌させていくところの恩寵をもって臨んでくる。神の霊が私たちに臨んでくるのにはやはり、神のそういった神的な変質変貌の業が、ここでは旧約的な示しによって与えられた。何といっても、イザヤ書において一番そのことがはっきり表れている。

洗礼のヨハネが、

「我よりあとに来る方は力あるもので、聖霊と火でバプテスマを施す」

と言った。この

「聖霊と火でバプテスマを施す者」

という――「火」と「霊」はこの場合、一つなんですが――その「聖霊と火」という言い方がやはりこのイザヤ書6章のこういったところと相呼応しているわけです。

ですから、旧約で一番そういった聖霊の事態においてはっきりと

「罪を焼き滅ぼして神のものとする」

ということは、何といっても、御霊のことに一番深いイザヤ書において、それが示されたということは非常にきわめて注目すべきことであるわけです。

●エリヤの霊エリシヤの上にとどまる

もうひとつまた別な角度からみますと、列王紀略下の2章に、エリヤが天に昇るというところです。その弟子のエリシヤが自分の先生のエリヤから霊を受けたいと願った。8節に、

「8**エリヤその外套（うわぎ）をとりて之を巻き水をうちけるにこなたとかなたにわかれたれば、二人は乾（かわ）ける土の上をわたれり。**9**渉（わた）りける時エリヤ、エリシヤにいいけるは、我が取られてなんじを離るる前に汝わが汝になすべきことを求めよ。エリシヤいいけるは、なんじの霊の二つの分の我におらんことを願う。**10**エリヤいいけるは、汝難き事を求む汝もしわが取られてなんじを離るるを見ばこの事なんじにならん。しからずば此事なんじにならじ。**11**彼ら進みながら語れる時、火の車と火の馬あらわれて二人を隔てたり。エリヤは大風にのりて天に昇れり。**12**エリシヤ見て、わが父わが父イスラエルの兵卒よその騎車よと叫びしが、再びかれを見ざりき。ここにおいてエリシヤその衣を二片に裂き、**13**エリヤの身よりおちたるその外套をとりあげ返りてヨルダンの岸に立ち、**14**エリヤの身よりおちたる外套をとりて水をうち、エリヤの神エホバはいずくにいますやと言い、而して己も水をうちけるに水こなたとかなたに分れたればエリシヤすなわち渡れり。**15**エリコにある預言者の徒（ともがら）対岸（むかい）にありて彼を見て言いけるは、エリヤの霊エリシヤの上にとどまると。かれら来たりてかれを迎えその前にて地に伏して、云々」（列王紀略下2・8～15）

と。ここに、

「**エリヤの霊エリシヤの上にとどまる**」

と書いてあるでしょ。ここでエリヤが天界に行って、エリヤの分霊が、エリヤにあったエホバの霊がエリシヤに臨んできた。これがまた非常に注目すべき現象だと思うんです。

イエスは地上におられたときに、どんなに弟子たちが一時的にはキリストから按手されて霊の働きはしましたけれども、本当に霊が臨まない。キリストが十字架を通って天界に行かれて、それから本当に霊が臨んできて、彼らは立ち上がった。このエリヤの霊が、エリヤにおけるエホバの霊がエリシヤに臨むときも、エリヤが一緒にいるときはダメなので、彼が天界に行ってから、そしてその衣鉢を受けとって、衣鉢にこもるところのエリヤの霊がエリシヤに臨んだというようにここには出ていることも非常におもしろいと思う。

即ち、人を通して霊が臨むことはいい加減なことではない。本当に命懸けのことである。聖霊が伝わるということは、これは本当に命懸けのことである。そこに死というひとつの、あるいはそれは死でなくても、深刻な別れであるかもしれない。いろいろなことがある。

私の場合においては、私の兄貴が天界に行ってから私に、なかなか聖霊が臨むところまではきませんでしたけれども、しかし、信仰への救いというものはそこから来た。即ち、本ものが伝わるためには、どっちかが死ななくてはいかん。そういったような決定的なひとつのことを通して臨んでいくような、非常な厳粛な面があるということを、このエリヤとエリシヤの場合にも私たちはみるわけです。

もちろん、そうでない場合もありますよ。サムエルがサウロにエホバの霊を伝えたときは、本当に按手でもって伝わりました。しかし、サウロが本当に一遍死ななかったから、そのうちに霊が変わってしまって、そして、自分の大事な臣下であるところのダビデを追及する妬みの霊に変わってしまった。そういったようなこともやはり、サウロにおける霊の現象は何かまだひとつ欠けていた要素があったということを思わざるをえない。

●自分に死ぬときに聖霊は臨んでくる

そういう意味において、御霊が伝わるというときには、とにかくいろいろな場合がありでしょうけれども、死というような本当に砕けの事態を通らなければならない。これはさきほど読んでいただいたヨエル書においてもそうなんです。2章12節に、

「12**然れどエホバ言いたもう。今にても汝ら断食と哭泣（なげき）と悲哀（かなしみ）とをなし心をつくして我に帰れ。**13**汝ら衣を裂かずして心を裂き汝等の神エホバに帰るべし。**」

（ヨエル2・12～13）

「裂く」と言っても、「砕く」と言っても、

「ひれ伏し」

と言っても、何でもいい。とにかく、私たちはいつも自分を乗り越えて進んでいく。御霊の事態はまさにこの自分に死ぬときに、自分が本当に裂かれるところに、自分が本当にぶっつぶれるところに、そこに聖霊は臨んでくる。それをいい加減にしていこうとしたって、これは無理だ。

それはいい加減な気持ではダメなんだ。それで、はっきりとそのようなところを通るというと、今度はもの凄く展開していく。先に進んでいきます。倒れても躓いても転んでも、本当の前進というものはその態勢にある。それはごまかしのない世界であります。

地的なものにとらわれて、よさそうに思っていては、もう亡びにいく。今日読んだこのヨエル書2章を見ましても、非常に終末的な光景がそこに出ている。20世紀のこれからはもうはっきりしてますよ。とにかく、世界は神に背いている。キリスト教国なんていったって――何もキリスト教国ではない――どっちにしたところで、もう20世紀の文明は亡びに向かっている。これでこの20世紀が立つか立たないか。いや、あるいは非常なところを通らなければならないかもしれない。そういった現実に際して私たちが本当にキリストの福音の一番大事な、その中心になるところの核、霊核は、まさにこの御霊ですから。その点

で私たちははっきりと、人々に何と言われようが、これを進んでいく。

「もうそういったのはごめんだ。それは極端すぎる」

と言う人は、どうぞ、出て行っていただいて一向差し支えない。どうも私たちのことを、極端だの何だのといろんなことを言うのがあるらしいけれども、極端どころではないですよ。この本当の世界に来たら、最もこれは幅が広いんです。そして本当の柔軟性を持っている。本当の広さ、深さ、高さが限りなく――パウロが言っているとおり――くるので、そこらのよさそうなのとは違う。キリストは言われた、

「我は熱きか冷たきかを好む。生ぬるきは吐き出す」

と。霊のキリストが言われたので、我々は生ぬるきクリスチャンではない。祈りの世界で叫ぶのがいいのでも何でもない。あるときは、本当に静かで、

「一体、彼らは祈っているのだろうか」

なんて思われるくらいで一向差し支えない。しかし、その奥は本当にこの聖霊の臨んでいる事態です。そういう意味において、もうとにかく御霊のほか代えることができない。

●キリストのペンテコステ

そこで、何といっても、まず福音書に行きたい。福音書のどこへ来るかというと、どこだっていいけれども、マタイ伝3章。イエスがバプテスマを受けにやっていらっしゃった。もちろん、彼は悔改（くいあらため）のバプテスマは必要ない。必要でないんだけれども、

「15**イエス答えて言いたもう『今は許せ、われら斯く正しき事をことごとく為遂（なしと）ぐるは、当然なり』**

と洗礼のヨハネに言って、悔改の必要のないキリストは自らを本当に――「悔改」と言ったって、これは心を翻すこと、心を常に神に向かって翻すことです――神に向かって心を翻したらば、キリストは同時に聖霊を受けてしまった。これが、

16**イエス、バプテスマを受けて直ちに水より上り給いしとき、視よ、天ひらけ、神の御霊の、鴿のごとく降りて己が上にきたるを見給う。**

と。鳩だって鷲だって何だっていいですよ。そんなものは形容の仕方だから。とにかく、聖霊が具体的に臨んできた。キリストの公生涯の一番先に、キリストは聖霊降臨をやったわけです。これはキリストのペンテコステなんだ。キリストのペンテコステをいい加減にして先に進むわけにいかない。

17**また天より声あり、曰く『これは我が愛（いつく）しむ子、わが悦ぶ者なり』」（マタイ3・15～17）**

と。なるほど、イエスは乙女マリヤから聖霊によって生まれた特別なひとです。特別なひとだからそれでもうあと自明的によろしいというわけではない。彼はやはり、公生涯に出るときに、そのようなひとつの段階をはっきりと踏まざるべからずということです。

キリストが御霊を受けられた。いわんや、我々クリスチャンが同じく御霊を受けなければ、先に進むわけにいかないんです。もちろん、キリスト教を受けてから20歳そこそこで御霊にぶつかっているのは勿体なすぎるわけです。それだけ恩寵が素晴らしいのだから、これは本当に選びの器なので、それだけしっかり自覚してくれなければ困る。

●霊身一如

そういうわけで、キリストが御霊をしっかり受けとって、御霊のひととなり、まさにキリストは霊身一如となった。

「霊身一如」

というのは、今日私は演題を書きながら、さて何という題にしようかと思って、その時に与えられた言葉ですけれども。全存在が御霊で貫かれる。彼の生命はもう全く聖霊なんです。我々も、もうこの御霊は、聖霊はいかなるものとも代えることができない。それは正直そうです。

「自分の信仰」

なんて言って、まだ

「信仰によって義とされる」

なんて、命題を言って一生懸命でやっている。そんな無教会時代は――私はもう無教会時代を何十年とやってきてしまったものだからね――何か自信がないんですよ。何か本当の力がないんです。信仰のすじはいいなと思うし、集会ごとに何か満たされたような気持で帰ってくるし。とにかく、一流の先生だからね、内村鑑三、藤井武、塚本虎治なんていうのは。

「今日はどうもつまらなかった」

ということが正直、一回もなかったと言ってもいいくらいでしょう。それくらい、知的にもまた心の面でも満たされてきた。そうだけれども、何かやはり欠けているんだね。そこが即ち、この使徒たちの聖書の御霊の現実からはズレていたということなんです。

ところが、この中に私がとにかく入ってしまってから、

「確かに違うなぁ」

と。聖書の文字が躍ってきている。本当に躍動してこちらに迫ってくる。そして、

「わが言（ことば）は霊なり生命（いのち）なり」

ということが形容詞でないということが分かってきた。そういうことになってきましたら、もうこの御霊は代えられないんですよ。聖霊が抜けたら、本当にもぬけのからで、これくらいつまらないものはない。私からこの聖霊が抜けてしまったら、セミのぬけがらみたいなもので、どうにもならん。

そういうわけで、これは生命の生命です。本当にその意味においては、もう楽でしょう

がない。だから、私たちはこれを人に何とかして伝えたい。エリヤがエリシヤに与えたように。何とかしてこれを、

「ああ、あの人は聖霊を受けたらいいな」

と思うわけだよね。それが自ずから皆さん一人びとりが何かその友人に、求めている人、苦しんでいる人に何とかしてこの御霊を与えるということが我々の生涯の使命であるわけです。そういう意味において、キリストの霊のバプテスマということは、本当にクリスチャンが新しく目を見張らなくてはいかん。

●最善なるものはまず聖霊

それからその先、キリストは何をされたかというと、荒野の一騎討ちです。ここがまた大事なところです。キリストは霊に満たされたから、

「さて、私はこの神の霊でもってひとつ戦ってやろう」

と言って、彼は神の霊を私して、

「大いに自分は霊的な人物である」

なんてなことでサタンと戦ったかと思うと、そうではない。彼はどこまでも神の前にひれ伏していました。

「神に仕えよ、神を畏れよ。神を試みてはいかん」

と言って、サタンとの一騎討ちも正に神の前に平伏しの姿でもって一騎討ちをした。

御霊の世界で

「私は霊的な人物である」

とやって驕り高ぶったら――驕りはサタンの霊だから――驕りだとか、妬みだとか、これはみんなサタンですよ。妬み争い驕り、これはみんなサタンに通ずる。

でありますので、私たちはどこまでも平伏しです。あなた方一人びとりに神さまは最善をなさろうとなさっている。その最善なるものはまず聖霊なんです。最善、最深、最高なるものはこの聖霊です。これがきたら、たとえ願いは聞かれなくても、最大の願いは聞かれているんです。そして、運命環境を自分でもって創造していく。自主自由なんて言ったって、聖霊がなくて自主自由もヘッタクレもないですよ。御霊がきたらば、耐え忍ぶときは耐え忍ぶ。戦うときは戦う。突破するときは突破する。本当にそのことをやりたいと思うときは、それに打ち込んで祈っていけば、それは与えられるというようなわけです。もし、これから退いたら、

「塩がもし塩味を失ったならば、それは棄てられてもうどうにもならん」

とキリストが言われたとおり、我々の中から聖霊の光、聖霊の塩が失せたら、いわゆる普通の人になってしまった方がよっぽどいいくらいだ。この世的にやっていった方がよっぽどいいでしょう。

しかしながら、この御霊の人、霊身一如の、

「わが生命はこのキリストの霊である」

ということはもう正直、一如ですから。「の中」という、

「中」

をもうひとつ言うと、この

「一如」

ということになる。中も外もないんです。ということは、この一如ということは、私たちのいわゆる肉体が全部霊化したなんて、そんなことを言っているのではない。この「身」というのは、全存在ということです。全存在が御霊で貫かれて――あいかわらず罪びとは罪びとだよ。しかし、罪びとでありながら、どっこいその本質は本当に神の霊で貫かれて――浸透されている。だから、気がついて、

「主さま！」

と霊界の主に祈っても、

「わがうちの御霊の主よ！」

と祈っても、それはどれでもいいですよ。要するに、本当に直ちに一つである。これはキリストの十字架の恩寵を、十字架の贖いを受けとった者にとりましては、いついかなるときも即刻この聖霊の事態であるわけです。

●パウロのペンテコステはダマスコ

その意味において、私たちは何といっても、まずペンテコステの使徒行伝2章を読むよりも、パウロのところを読みたいわけです。そこで、使徒行伝9章です。私は、どちらかというと、パウロみたいな人間ではないけれども。パウロは非常に我の強いやつです。非常に意志の強い、また知識もあり、また感情も豊かで、なかなかちょっと珍しい人物です。特になかなか意志が強い。今の言葉でいうと、これは造反の親玉ですよね。キリストを信ずる者を迫害して、これを殺すをよしとしたようなやつですから、間接的な殺人犯人だ。それがダマスコ途上で、

「サウロ、サウロ、なんぞ我を迫害するか！」

という復活のキリストにでっくわした。パウロにとってはペンテコステはダマスコなんだ。キリストにとってはヨルダンです。キリストのヨルダン、パウロのダマスコ。キリストはもう直接にパッときてしまった。パウロの方は一遍、復活のキリストにひっくり返されなければどうにもならない男です。話し合いだの何だのではどうにもならない。もう光でもって撃たなくては本当にしょうがない。

「主よ、汝は誰ぞ!?」

なんてやっているんだからね。すると、

「我は汝が迫害するイエスである」

云々と。まぁ、彼はおったまげたわけです。そして、アナニヤを通して按手されて、

「わが眼より鱗（うろこ）の如きもの落ちたり」

と。パウロのペンテコステは、正にダマスコで彼は完全に打ちのめされた。ヨハネみたいにスーッと浸透して化せられるという面もあるし、パウロみたいに急転直下するような行き方もある。それは人によっていろいろです。

どのみち、新しく――「上から」と言っても何でもいいですが――霊界から、別な絶対次元から、新しく臨むところのものに新たに触れるまでは、それを受けとるまでは、人間はどうにもならん。受けとってもどうにもならない面もあるよ。あるけれども、しかしその人のいろいろな生まれつきの才能や性質というものは、

「キャラクター　ネバー　チェンジ」（性格は決して変わらない）

という言葉もあるように、なかなかチェンジしない。しかし、キャラクターがチェンジしなくても――パウロもなかなかチェンジしてないところがある。すぐ誇りたがったりなんかする――けれどもしかし、その誇りはもはや自分を誇るのでなくて、「主を誇る」ということに変わっている。誇るという感情はあいかわらずあっても、内容が変わってきた。内容が主を誇ることになった。自分を誇るのではない。そこはもうはっきりしている。それをパウロは決してごまかしてはいない。

そういうことで、人間はそれぞれありますよね。けれども、それは主体が変わってくる。内容が今度は変わってくる。現象的には同じような現象であっても、質と内容が変わってくる。これは上からくることによってそうなる。もし、現象面まで全部同じになったら、これはつまらない。みんなが同じようなことになってしまうから。類型的になる。

よく霊的な人たちのあいだで、みんな同じようなことを言ってみたり、同じような形をしてみたり、女の人たちが同じ髷（まげ）を結ってみたりね。そんな必要はひとつもない。みんなそれぞれの姿で一向差し支えない。いや、実にみんな特殊な方がいいんです。それぞれの在り方をもって、神さまは天下一品に造っているんだから。その在り方、その質、それがみんな神的に神の栄光を現していく。

そのためには自分の努力や自分の信仰ではできない。それは上から本当に臨んでこなければダメなんです。その点ではもうはっきり、

「聖霊を受けるということがいかに重要なことであるか、本当の永遠的なことであるか」

ということがいえる。もうそうなってきたら、人をうらやんだり、ねたんだりすることはなくなる。自分自身が天下一品なんだから。本当にそうですよ。神の霊が臨んだならば、もう皆さん、キリストの霊が臨んだら、もうこれは他の何ものとも代えられない。

「キリストにはかえられません」

という聖歌があるけれども、キリストには代えられないさ。けれども、このキリストの御霊、わがうちなるこのキリストの御霊には何ものも代えることができない。これははっきり言えなくてはいかん。

●約束の霊を与える

今度は、ペンテコステのところにいきます。十日間、一緒に祈っていた。そうしたら、ついにそこに聖霊が臨んできた。使徒行伝1章8節に、

「8**然れど聖霊なんじらの上に臨むとき、汝ら能力（ちから）をうけん、而してエルサレム、ユダヤ全国、サマリヤ、及び地の極（はて）にまで我が証人とならん**』」（使徒1・8）

御霊が臨まないうちは証人となれないんです。我々がキリストの証者、福音の証者であると言うためには、はっきりと御霊の人とならなければ。パウロが、

「御霊を持たざる者はキリスト者にあらず」

と言ったとおりです。ローマ書8章が徹底的にそのことを言っている。御霊が臨まなければ、もう始まらないし、

「私がお前たちに約束の霊を与える」

という。ヨハネ伝14章以下が重要なところです。

「この約束の霊即ち聖霊が臨んできたら、私の言ったりしたことがみんなつかめてくるぞ。そして、私と本当に一つとなるぞ」

というわけでしょ。私たちが、聖書がそういった現実であるのだから、聖書を読むためにはもう絶対に聖霊がきてなければいかん。

●霊言一如

しかも、この御霊と御言は、霊と言とがいかに離すことのできないものであるかということは、第三イザヤの預言をみてもわかる。イザヤ書59章21節に、

「21**エホバいい給わく、なんじの上にあるわが霊、なんじの口におきたるわがことばは、今よりのち永遠になんじの口よりなんじの裔（すえ）の口より汝のすえの裔の口よりはなれざるべし。わがかれらにたつる契約はこれなりと。此はエホバのみことばなり。**」（イザヤ59・21）

ここに御霊と御言がまた一つに書いてある。そのことはエペソ書6章にも反映している。

「17**また救の冑（かぶと）および御霊の剣、すなわち神の言を執れ**」（エペソ6・17）

と書いてある。聖書を読んで、神の言なるこの聖書を読んで、この言から直ちに御霊を受けとる。御霊の響きを受けとる。大体、言葉というものはそうじゃないですか。霊というのは、さっきから言っているとおり、気でしょうが。息を発していなければ、言葉にならない。我々は何かものを言うときには、必ず息が発せられている。息なしには言葉はあり

えない。ですから、神の霊から発するところの言と気とは不可分の関係にある。

「**わが言は霊なり、生命なり**」

で、「立て！」といえば立つんです。跛者に、

「**わがうちなるものをお前に与える。イエス・キリストの名により歩め！**」

と、この御霊の人ペテロが叫べば、このあしなえ跛者は立ち上がった。

そのような、神の言を本当に

「霊言一如」

として化体（かたい）していく。神の霊言一如でもって化体している。この読み方をしょっちゅう祈り心でやっていく。もうこれが聖書の読み方の秘訣であります。これを君たちがとにかくやっていく。読むと直ちにその世界に入ってしまう。そういうことをやってごらんよ。もうそれは大変なことになるから。

あなた方、今20歳代のが40歳くらいになったら。ぜひとも、そのようになってください。そして、それはどん底から人を救うためですよ。そういった事態は人を救うところの愛です。審いてはいかんぞ。審いたら、これはパリサイになる。霊的に豊かになればなるほど低くなって、そして人を救っていく。担っていく。引き受けていく。いいですか。人の嫌がることは黙々としてやっていく。

「あの人たちは本ものだ。彼らの霊的な力は全部、人を救うために、担うためにやっているな。なんと驚くべき人たちだ」

という、これが私たちの使徒的信仰の本当のねらいなんです。いわゆる祈り三昧だとか、霊的に人を見破って、どうのこうのと審いてみたり、そんなことではない。私はそういう霊的というのは、いやらしくて嫌いなんだ。

本当に担っていく。パウロがコリント前書13章で愛をあれだけ強調したのは、何もパウロは霊をただ否定したのではなくて、本当にそのような愛に溢れるところの霊でなければダメだということです。これは聖霊の、まことにこの御霊の愛であります。愛の霊である。そういった愛というのは、いつも申し上げているとおり、担いあげであり、救いあげである。人を包み、赦し、担い、引き受ける。そういったのが、私たちが今本当に受けとろうとしているところのこの聖霊なんです。

だから、どんなに苦しめられようが、迫害されようが、どっこい、こちらは笑ってそれを耐えていくことができる。いいですか。どんな事態にきましても、どうぞ、決してそれでへこたれずに行く。キリストのこの力あるところの愛の霊はそんなことでへこたれない。パウロの書簡に、

「**汝らを呪う者のために祈れ**」

とかいう言が出てくるのは、パウロは本当にその角度から聖霊を受けている人です。

●約束の聖霊で印せられてある

もう少し読みます。ヘブル書9章は非常に大事なところです。十字架と聖霊のことが出てます。9章11節に、

「11**然れどキリストは来らんとする善き事の大祭司として来り、手にて造らぬ此の世に属せぬ更に大なる全き幕屋を経て、12山羊と犢との血を用いず、己が血をもて只一たび至聖所に入りて、永遠の贖罪を終えたまえり。13もし山羊および牡牛の血、牝牛の灰などを穢れし者にそそぎて其の肉体を潔むることを得ば、14まして永遠の御霊により瑕なくして己を神に献げ給いしキリストの血は、我らの良心を死にたる行為より潔めて活ける神に事えしめざらんや。**」（ヘブル9・11～14）

「永遠の御霊」という言葉がここにあります。それからペテロ前書4章12節、

「12**愛する者よ、汝らを試みんとて来れる火のごとき試練を異なる事として怪しまず、13反ってキリストの苦難に与れば、与るほど喜べ、なんじら彼の栄光の顕れん時にも喜び楽しまん為なり。14もし汝等キリストの名のために謗られなば幸福なり。栄光の御霊、すなわち神の御霊なんじらの上に留まり給えばなり。**」（ペテロ前4・12～14）

と。もうパウロやペテロやヨハネの書簡や、とにかく新約聖書をみて、「御霊」とか「聖霊」という言葉が本当にこうまでも書かれていたかと驚くわけです。

エペソ書1章13節に、

「13**汝等もキリストに在りて真の言、すなわち汝らの救の福音をきき、彼を信じて約束の聖霊にて印せられたり。14これは我らが受くべき嗣業の保証にして、神に属けるものの贖われ、かつ神の栄光に誉あらん為なり。**」（エペソ1・13～14）

と。この約束の聖霊で印せられてある。こないだ私は言いました。

「私たちはキリストの名に印せられてある者である」

と。名をおびている者である。だから、御名は私たちの身体の中に印せられてある。サタンの手下になる者は「６６６」式なんだけれども、こちらはキリストの名に印せられてある。また約束の霊にて印せられてある。「印する」という字は「キャラクター」「押しで」という字ですけれども、生まれつきのキャラクターではなくして、新しく聖霊と御名が本当に私たちの第二のキャラクターになった。

でありますので、もはや、これはパッと気がつけば、すぐその中にある。これはもう絶対に十字架の恩寵、絶対恩寵の中でもって、かく在るんです。信仰でもって、

「さぁ、どうだろうか、こうだろうか？」

なんて、そんなことではないですよ。いわゆる「信仰」なんてことを言っているのではない。

本当に贖いとられた者である。キリストに本当に贖いとられた者であるということ。これは瞑想ししっかりと受けとってくださいよ。クリスチャンというのは

「自分の信仰」

というものをいつも何か問題にしているんだよね。

「まだ、私はどうもこの世的な考えの方が多くて、信仰的な面が少なくて…」

と、そんなことをいつも測っている。そんなものをいつまで測っていてもダメだよ。そんなことではない。

「自分」はぶっ飛んでいるんですよ。ぶっ飛んでいるし、ぶっつぶれているんですよ。自分でぶっ飛ぶ必要はない。キリストはぶっ飛ばしてしまったんだから。それが十字架なんです。キリストはぶっつぶしてしまったんだから。また、キリストの十字架は私たちを本当にひれ伏させてしまったんだから。だから、キリストの十字架というものはそれだけもの凄い贖いなんだ。もう、私はその次は異言になりそうなので、今ちょっとやめたけれども。言葉が出てこない。そういう中に本当に入れられて、もうあとから爆発してくるのは、異言的な言葉になりそうになってしまう。

そこにはもうキリストはただでは置かないですよ。

「なんじを喜ぶ」

と言って、本当に御霊の注ぎがかかってくる。そして、その時に、皆さん、聖書をよく読んでいると、聖書の言葉が自分の言葉になってしまうんです。そして、グーッとその御言が直ちに化体して動いてくる。だから、「聖書をよく読みなさい」というのは、そういった本当に身体で読むことです。

●キリストを汝らの心に住まわせ

エペソ書には、

「22 **汝等もキリストに在りて共に建てられ、御霊によりて神の御住（みすまい）となるなり。**」

（エペソ2・22）

とか、いろんなことが溢れているでしょ。また、エペソ書3章16節にも、

「16 **父その栄光の富にしたがいて、御霊（みたま）により力をもて汝らの内なる人を強くし、17 信仰によりてキリストを汝らの心に住まわせ、**

この、

「**御霊により力をもて汝らの内なる人を強くし**」

ということと、

「**信仰によりてキリストを汝らの心に住まわせ**」

ということは同じことを言っている。

「御霊を受けとったことによって」

ということです、「信仰によって」というのは。御霊と信仰とは別なものと思ったら困るですよ。「信仰によって」というのは、

「キリストがかくも贖いとって、聖霊をくださったというこの事実によって」

ということです。どうも「信仰」という言葉が躓きになるね。「信仰によって」というと、

「私はまだ信仰が弱いが、なかなかそこまでいかない」

なんて、何を言っているか。それなら、

「恩寵によって」

と言ったらいい。「信仰によって」というのは、「恩寵によって」と読み替えたらいい。「信仰」というのは何を信仰しているんですか。恩寵を受けとることではないですか。キリストの恩寵を受けとらないで、何が信仰ですか。「信仰によって」なんて言うと、信仰をサムシング（何ものか）だと思うからいかん。

「恵みによりてキリストを汝らの心に住まわせ」

ということです。

「キリストを住まわせ」

というのは

「キリストの御霊」

ですよ。キリストは天界にいらっしゃるんだから。パウロはこういうことを妙な厳密さをもって言わないんです。

「キリストが住んでいる」

ということです。

「天界のキリストは御霊をもってお前たちの中に住んでいる」

と、そんなことをいちいち説明的に言わない。それを「キリストが住んでいる」と、バッと言うんです。

汝らをして愛に根ざし、愛を基（もとい）とし、18凡ての聖徒とともにキリストの愛の広さ・長さ・高さ・深さの如何許（いかばかり）なるかを悟り、19その測り知る可（べ）からざる愛を知ることを得しめ、凡て神に満てる者を汝らに満たしめ給わん事を。」（エペソ3・16～19）

「愛」というものを観念としたらダメですよ。「キリストの愛」と書いてあったって、分析したらダメ。

「キリストという愛に根ざして、キリストという愛を基として、そのキリストという愛の広さ・長さ・高さ・深さ」

ということ。そういう、突き破った読み方をしなければダメです。文法的な読み方をしたらダメ。だから、ギリシア語やヘブライ語ができるやつはかえって分からない。では、あなた方は勉強しなくてもいいなんて、そういうわけでもないけれども。もう、そんな言葉

づらのことではないんです。一流の昔の坊さんのお経の読み方だってみんなそうなんだ。禅の方でも、

「万法（みなもと）源に帰するを禅となす」

と書いてあるね。万法の源に帰ることが本当の禅であると。

「万法の源」

とは何ですか。キリストではないですか。それに帰ることが本当の信であり福音である。だから、禅のこんな言葉は、福音でいくと、スイスイと読めてしまう。何も難しくない。これは無双禅師の言葉だ。

ときどき言う例の、

「菩提もと樹なく名鏡また台にあらず。本来無一物。いずこにか塵芥をひかんや」

というあの例の有名な米つき小僧の言葉がある。本来無一物。本来、無なんだよな、私たちは。本来、全部これは与えられたものなんだから。存在そのものが与えられているんだから。

●キリストの光で一切を見る

こんなことを言ったらちょっとおかしいけれども、二、三日前に大道でもって易者がいたから、ちょっとみてもらった。私の名前と生年月日を聞いて、私の顔を見てね、

「あんたは大変なひとだ」

と言う。「大変な人」というのは、非常なちょっとケタがちがう人だという意味です。それは、その生年月日やいろんなことでそうなったか何か知りませんけれども、やはり、私たちはこの御霊を受けると、みんな一人びとりが大変な人なんです。あなた方一人びとりは大変な人なんだ。そういうわけで、第一級だというわけです。それは我々の中に宿ってくださるところの御霊が私たちを変えていくわけです。

だから、どうぞ、皆さん一人びとりが本当にこの御霊を受けたら、これは大変な人なんであります。そういう意味で、どうぞ、もう人に何と言われようと、この恩寵からはずれたならば、これはもう普通人よりかダメになる。どうぞ、そういうことでもって、

「何とかして自分は一生を通して本当にキリストの証人になりましょう」

と。今は普通のキリスト教ではどうにもならんということははっきりしている。教会もダメ、無教会も足踏み。もちろん、ダメでないところもありますよ。それは目覚めているところもあるでしょう。けれども、ひとのことはどうでもいい。我々は本当に歴史的使命を負っているんですから。今は外に表れないかもしれないけれども、神さまは必ず君たちを使いたもう。

私も本当に１９７０年からもの凄いことになるらしいようなことを言っていたけれども、それはどうでもいい。とにかく、これからが私の生涯だと思っているんです、正直。だから、

いい加減な死に方はできない。それはまた私は確信がある。今私たちがいただいているこの使徒的信仰の高さ・深さ・広さというものはもの凄いことです。カトリックでもプロテスタントでもないんですから。本当にキリストの直弟子たちと共に直結して、もう世界中の真理、何でもござれというようなところに進んでいく。何とかして、

「キリストの福音が何と素晴らしいか」

ということを私たちは、皆さんがいただいているいろいろな角度から証していく。どんなにそれがみすぼらしいようにみえても、それは天界においてはダイヤモンドよりも光ることなんです。決して、自分を卑下してはダメですよ。

「天上天下唯我独尊（ゆいがどくそん）」

というけれども、わがうちなるキリストは独尊のひとです。

どうぞ、皆さんもそのようにいただいているのでね、結婚問題はどうだっていいよ、何だっていいよ。そして、あなた方は本当に助け合ってくださいよ。人間的なものを突き抜けていかなかったらダメですよ。決して、へこたれてはいかん。へこたれることはないです。もう何とも表現つくすことができない。

まぁ、大学生なんて言ったって、レッテル大学生が一杯いてさ、何が大学だ。台無し学ばっかりやっている。本当に大学と言うならば、まずこのもの凄い真理の真理であるところのキリストを受けとらなくては。キリストがどんなに素晴らしいかということを牧師さんたちが知らないからしょうがない。ただもったいぶってやっているだけだから。いくらゲーテが偉くたって、晩年のゲーテは、

「私は無条件にキリストの前にひれ伏す」

と言っているではないですか。これは死ぬ二週間前ですよ。それであるのに、ドイツ文学は「ゲーテ、ゲーテ」と言っているが、私ももちろんゲーテを尊重するけれども、それはキリストの光でちゃんと見ているからさ。ゲーテであろうとダンテであろうと、みんなキリストの光で見ているんだ。

「小池先生は、ゲーテだのダンテだのと言って、あれは少し変てこなキリスト教だ」

なんて、何をぬかすかと。キリストの光で私は一切を見ているんです。間違えては困る。

どうぞ、皆さんも、自然科学の方のことをなさる人でも、そこに本当のインスピレーションがくる。そして、人類は作られたものによって自分がおかしくなるのではなくして、素晴らしい自然科学的知識やもの凄い能力を本当に神の法則に従って、これを幸いにしていくその一番大事な根底が欠けてしまったから、おかしくなってしまった。その点では、しかし、湯川さんなんかは気がついていらっしゃる方だと思いますけれども。

●御霊の愛

御霊の愛がどういうようなことであるか、箴言の中にそれにふさわしい言葉がある。17

章9節、

「9**愛を追求むる者は人の過失をおおう。人の事を言いふるる者は朋友をあい離れしむ。**」（箴言17・9）

これはもうしょっちゅう行われていることです。キリスト教会でも、何か人の悪口ばっかり言っている。人の事をああだこうだと言う者は人をあい離れしめて、友人関係を裂いていくようなやつだと。この御霊における愛というものはそういうものでないということですね。それと似た言葉が10章12節、

「12**怨恨は争端をおこし、愛はすべての愆を掩う。**」（箴言10・12）

という。私がさっき言った赦し担いの愛であります。そして、箴言の8章に智慧、聡明を霊に例えて言っている。「ホクマー」というのが「悟り」という字ですけれども。ゼカリヤ書12章10節に、

「10**我ダビデの家およびエルサレムの居民に恩恵と祈祷の霊をそそがん。**

「恩恵と祈祷の霊」という言葉があります。

彼等はその刺したりし我を仰ぎ観、独子のために哭くがごとく之がために哭き、長子のために悲しむがごとく之がために痛く悲しまん。」（ゼカリヤ12・10）

不思議な言葉ですが、

「エルサレムの居民に恩恵と祈祷の霊をそそがん」

という。なお、皆さんはこの預言書を読みながら――預言書にかぎりませんが――御霊のことについては特に注目して聖書を読んでください。まだ私はここにたくさんあげてあるんだけれども、もういちいち読みませんが。詩篇33篇6節に、

「6**もろもろの天はエホバのみことばによりて成り、天の万軍はエホバの口の気によりてつくられたり**」（詩篇33・6）

この「気」が「ルーアッハ」という字なので、「霊」なんです。この御言と気とがやはり正に一つに使われているところです。

そこで、さきほどからいろいろ言っていたイザヤ書の大事なところをちょっと見ておきます。イザヤ書42章、

「1**わが扶くるわが僕わが心よろこぶわが撰人を見よ。我わが霊をかれにあたえたり。かれ異邦人に道をしめすべし。**」（イザヤ42・1）

エホバの僕の歌の一番先に、

「わが霊をかれにあたえた」

という。エホバの僕、エホバの婢という、キリストの僕なる私たちが正にこのイザヤ書42章以下のエホバの僕のように神の霊を受ける。キリストの霊を受けなければ、本当の僕ではないということです。……